

この世界でも僕は正義  
の味方に憧れる。

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

聖杯の泥の影響で死んだ衛宮切嗣……次の行き先はヒロアカの世界。  
今度こそは正義の味方になれるのか？

※初心者ですのでミスが多いと思います。それでも良い方はどうぞ

# 目次

死後の世界	31
コンビニ強盗	25
試験	17
受験発表／お仕事	10
大変な1日	5
戦闘訓練	1



# 死後の世界

「ここは… どこだ。」

見たことがない景色、周りには物がなくどこか気味が悪い場所だ。

「死後の世界さ」

そこには少年… 少女? どうでもいいが僕は死んでしまったらしい。士郎を1人にしてしまった… でも士郎はしつかりしてるから大丈夫かな。

「それで僕はこれから地獄にでも行くのかな?」

「まあ… 本当はそうなる所だつたんだけど、少し事情があつてね。」

すると目の前の少年は変な窓を作り出した。前までは簡単に歩くことが出来たのに… こんな老体では歩くのも辛い。

「どれどれ… なんだこれは?!」

その窓には1つの町が写しだされていた。

「なんて事だ… 何故一般人が普通に魔術を使っているんだ!」

そこでは普通の高校生、普通の社会人誰もが当たり前のように魔術を使用している。

「やつぱりそう思っちゃうよね… まあ聞いてよ。」

少年は1つの写真を取り出し、渡してくる。

「この世界には1人ひとつの個性つて物が存在しててね、君が知ってる魔術と思つてくれていいんだ。」

「で、この写真の男は誰だい？」

「待つてよ、説明はまだ終わつてないんだから！」

「分かつたよ、済まなかつた。」

本当に子供に見えるな、多分かなり偉い人なんだろうけど。

「この世界には正義と悪が存在しててね、その写真の人は正義の象徴なんだ。まあ・見た目からも察する事が出来るな。」

「それで、僕に何をして欲しいのかな？」

「この人はもう正義の象徴としての活躍は限界なんだ。」

「そうは見えないけど：この少年が言うなら本当なんだろう。  
「へえ・：それでこの人の後継者みたいな人はいるのかい？」

「いるけど：まだまだ育つてないんだよ。だから君には転生？をして貰つてこの世界で正義の味方になつて欲しいんだ。」

「転生?! もはや魔法の領域じやないか：」

「それで行つてくれるかな？」

「別に構わない……けれど問題があるだろ。」

「個性の件かな？ それなら大丈夫だよ。起源弾と君の魔術を個性にするから」「分かったよ、ならば起源弾は威力の調整が出来るようにして欲しい。」

「他にも聞きたい事がある、継承者の特徴はなんだい？」

「それは教えられないな、君自身が見つけるべきだよ。」

「起源弾は個性に対して効くのかい？」

「うん、大丈夫だよ。」

「そうか……こんなに物騒な世界なんだ拳銃の持ち込みぐらいは大丈夫だろう？」

「それはダメだよ！ 拳銃を持ち歩いてたら捕まっちゃうよ。」

「なんだと……起源弾が使えないじやないか？」

「多分……ヒーローになれば大丈夫だからそれまでは我慢だね。」

「ヒーロー？ 正義側はそう言われてるのかい？ まるで少年が書いた夢の世界じやないか。」

「まあまあ……この世界の人達の事はあまり悪く言わないでよ。」

質問はこれぐらいで大丈夫か・拳銃を使えないのは痛いな：

「じゃあ行くよ、速くこの世界に慣れなきやいけないし……」

「そつか……この窓に触れれば行けるよ、頑張ってね正義の味方さん。」

こうして僕は窓を触る… すると意識が奪われる。

(今度こそ・ 僕は・ 正義の味方に… なれるかもしけな凶…)

「あつ・ その世界に行つたら記憶が消えるから説明しても意味なかつたかも… それに赤ん坊から始まるし…」

「まあいいよね！ 頑張つて！ 衛宮切嗣さーん！」

# コンビニ強盗

「兄…ん…起き…起き…遅…する…」

「起きてる…起きてるから…」

僕の一日の生活は弟の…士郎のモーニングコールから始まる。

「兄さん、最近夜遅くまで何してるのさ?」

ここで本当の事を言う訳にはいかない、士郎は本物の正義の味方を目指しているんだ。

「なにもしてないよ…時間があまりないね早く学校に行こう」

「また隠し事かよ!同じ歳なのに子供扱いしてるだろ!それに仏壇にちゃんと挨拶してから行かなきやダメだろ!」

「まあ…そうだね、挨拶ぐらいはちゃんとするから先に行つて良いよ。」

「ちゃんと挨拶して学校に遅刻せずに行つてくれよ?」

僕と士郎は別々な学校に通っている、だから僕は遅刻をしても士郎に直ぐにバレることは無い。

「ああ… 行つてらっしゃい、土郎。」

士郎が学校に行つたのを確認してからパソコンを立ち上げる。

(やはり父さんはヒーローの仕事をしていて… ヴイランに殺られて死んだのか。)

父さんの死因は事故と聞いているが、この記事を見ると事故では無さそうだ。

「なんでヒーローは俺たちに死因を事故と教えてきたんだ?」

考へても正解を教えてくれる存在はない… それに長い事悩んで疲れてしまった。

今の時間を見ると… 8時40分。

(今日も遅刻だなあ…)

とりあえず学校に向かう事にする。

「はあ… 今日こそ土郎の方に連絡行くのかな…」

とりあえず遅刻する事は確定なのでコンビニに寄つて飲み物でも買うことにした。

(最近は色々な種類が売つてるな…)

そう思いながら飲み物を取ろうとすると…

「おはようございます、この店のお金を奪いにきました。」

本人も言つてる通り強盗だろう、しかし何故そんな事を正直に言つたんだ? それに顔

だけを隠し素手で銀行強盗を成功させるつもりらしい。

(素手…なら個性は戦闘に特化した物なのだろう)

「お金を詰めてもらつてよろしいでしようか?」

(ヒーローが来るまで10分はかかるだろう。それにヒーローが来ても個性が分からなければ突入するのに支障をきたす…)

すると他の客が強盗の手に何も持つてないから自分でも勝てると思い、強盗に襲いかかる。

すると客に触られた強盗は何故か転んでしまった。

「ほう? 不思議な事もありますね、立ち上がりません…」

「俺の個性は”相手を這いつくばらせる”だ! 触つてる間はお前が立つことは有り得ない!」

(アホか…一般人とはいえ有利な状況を自分から崩そうとすなんて。)

「説明ありがとう…コレはお礼です」

すると一般人の体が支えを無くした用に崩れ落ちていく。

「この方は死にました。これを見たら誰も私と戦いたくないでしよう? 見せしめとして良い役割でした。」

(何をしたんだ…重力を操る個性か? それよりも人を殺す事に躊躇いがない…大人

しくしてゐるしかないか……）

「しかし、予定が変わりました。私の個性を見たからには皆さんには　ここで死んで貰います。」

すると強盗の近くにいた5人全員が倒れる。

「やめてくれ……金だろ?! いくら欲しいんだよ!」

「大丈夫です、お金はいりません。」

すると両腕が歪な形になり痛みでのショック死だろ……白目になつて倒れている。

「後は……おや?あの学生は……」

「“固有時制御・二重加速”」

「!!」

相手の肩に触れ久しぶりにアレを作り出す。

「ガ……」

回し蹴りをくらい吹き飛ばされる

「何か肩に……個性を発動出来ない！」

僕は起源弾……そう名付けた銃の弾を作成でき、その弾を自分の手の先を作る。

その時に物体があるとその物体の中に作成される事は前から知つてゐる……けれども個性を打ち消す力があるのは知らなかつた……

「さあ……まだ続けるか……？僕はまだまだ……戦える」

「ふふふ、面白い学生さんだ。名前を知りたいので教えてくれませんか？」

「言う訳ないだろ……馬鹿が……」

「まあ……そのバックの中に君の名前が書いてる物があるでしようし……どれどれ？衛宮……切嗣……！君はお父さんとお母さんの件……知つているのかい？」

「お前はあの事件の事を知つているのか?!」

「そうか……衛宮切嗣、君は雄英高校に入るんだ。そして……次に会う時は君を殺そ  
う。」

そう言うと仲間が近くにいたのかどこかに消えてしまった。

「くそ……もう限界……か。」

「あいつの蹴り……凄い……効くな……

(雄英高校……目指す価値がありそうだ。)

「君！大丈夫か?!」

「すいません……限界なんで……病気に……お願ひします……」

こうして俺は意識を手放した。

# 試験

あの事件から半年……僕は雄英高校に入るために必死に努力した。

士郎も雄英高校に入るのが希望だったらしくとても喜んでいた。

そして今は実技試験の時間、筆記試験は問題がないだろうから最後まで気を抜かずにしていこう。

「兄さん、最後は実技試験だね」

「そうだね士郎。この試験は全員が競い合う仕組みになつてゐるみたいだから、試験を受けてる人全員を敵と思うんだよ?」

「分かつてるつて!兄さんこそ武器がなければ何も出来ないだろ?」

「……僕には起源弾がある」

「本当に大丈夫なのかよ……最近上手く作れてないのか分からぬけど弾の形から離れていつてた気が……」

『今日は俺のライブにようことそー!!? エブリバディ、セイ ヘイ!!?』

(ふざけた挨拶だ……ヒーローと言うのは全員こんな感じなのか?)

話を聞く気が失せたので配られたプリントを見てる事にした。

(0ポイントの敵… しかもこいつはこの中で1番強い… 裏がありそうだ)

「この0ポイントの敵について考えていると後ろから色々と聞こえてくる。

「おい、そこまでいう必要はないんじゃないかな？」

「む… 確かに言いすぎだったかもしれん。すまなかつた。」

(士郎… そんなに首を突っ込まない方がいいのに… 本当に損をするタイプの人間だな…)

『それじゃ俺からは以上だが… 受験生リスナーへ我が校の“校訓”プレゼント!』

『かの英雄“ナポレオン・ボナパルト”は言つた…』

—— “真の英雄とは人生の不幸を乗り越えて行く者”だと。

『“P l u s U l t r a”!! —— それでは皆、良い受難を!』

こうして僕の戦いが始まった。

「順位で目立たないギリギリを攻めていきたい… それにしても雑魚ばっかり倒してたら受験に落ちてしまう。」

基本的に雑魚は身体能力を上げて機械の関節部分に蹴りを入れれば壊れるくらいに脆い。

(そろそろやるか…)

僕は人が多いところに出る、やはりポイントが多く貰える機械はここら辺にいた。  
「……いい所にいたな。」

そう士郎を探していたのだ、僕は士郎の個性を上手く活用する方法を考えていた。  
一固有時制御・二重加速

「えつ?!誰だよ?!」

「貰つていくよ、士郎。」

僕は士郎が個性で作った木刀を奪つた、汚い手だが合理的な考えだつたと思う。

そして周りの敵を壊していく……固有時制御の反動で太刀筋がぶれてしまい倒し損ねた敵も数体出でしまつた。

「休憩終了……そしてそろそろなはずだ。」

音がする……待つてくれ想像より大きい?例の0ポイントの敵だ。

「兄さん……何で俺の剣を……つてやばいやばいどうするのさ?!」

すると皆が存在に気づいたらしく、逃げ出して行く。

「逃げ遅れ……助けたい……が、こっちの逃げ遅れは1人、あつちは10数人……」

考へている暇があれば僕は1人でも多くの人を助けたい、よつて1人を切り捨てる。

そう思い後ろを振り向くと……誰かが大きい機械に向かつて跳ね上がつた。

すると少年は、一撃で機械を沈める。

「アレを1発で壊すとは……いい個性だな。」

すると周りが盛り上がる、お気楽な奴らだ。今はテスト中だと言うのに。

「…！士郎、カバーしてやれ。」

「ええっ?!この距離は間に合わないでしょ?!」

少年は落ちているのだ…体への負担が多いんだろう。

「じゃあ逆にこの場を任せよ」

身体能力を強化して走る…でも間に合わないかもしれない。

(テストも時期に終わる…なら僕の出せる全力を出す!)

| 固有時制御・三重加速

少年の襟を掴む。

「士郎！」

「ええっ？分かつたから投げるなら優しく投げろよ！」

なかなか重いが全力で投げる、でなければ人は投げる事は難しい。

「なんで本気で投げるのさー！」

まあ…少しぐらい我慢してくれ、士郎。

(さて…僕はどうしようかなあ)

固有時制御の反動は当たり前だが存在する。

(ちよつとの痛みは我慢できるし、別に構わ……)

ストン

「……？ 何が起こつたんだ？」

痛みがなかつた上にもう地面についている……それに妙な感覚だつた、まるで時間が飛ばされたような感覚、不思議な感覚だ……

「兄さん！ 大丈夫か？」

すると少年を運んだ土郎が寄つてくる。

「土郎…… 横がどんな落ち方をしたか見ていたかい？」

「ええつと…… 見ていたはずだけど……あれ？ どうなつたんだつけ？」

何かがおかしい…… なんだこの違和感は？

『終了～！』

試験の終わりが告げられ、試験を受けていた生徒達は続々と出口へと向かう。

(あの奇妙な感覚…… 調べる必用があるな)

こうして僕の雄英高校の試験が終わった。

「この俺を働かせるとは……しかもヒーロー側の人間を助けるために高校に潜入させるだと?……ふざけるのも大概にしろ!」

「うるさいですね……この世界に連れてこられた人間なら説明は受けているでしよう?」

「分かっている、お前の言うことは聞いてやつただろう!」

すると目の前の男はケタケタと笑い質問をした。

「君のその性格でよくバレずに清掃員のフリをして入れましたね?」

「……」

すると男は機嫌を悪くし、自室に入つて行くのを確認した仮面の男はホワイトボードを裏返す。

「あちらの最初の転生者は衛宮切嗣……それに対しこちらはマフィアのボスですか……カード的にはこちらの方が強いですね。」

「楽しくなつてきましたね……また君に会うのが楽しみでしようがない……」  
彼の言葉を借りるなら……」

「過去に打ち勝てという▣▣試練▣■なのかも知れないですねえ……」

# 受験発表／お仕事

雄英高校の入試から数日、出久の元にも合否判定の通知が届いた。

『私が投影された！』

「……」

三角形の機械から映された立体映像、それはスース姿のオールマイトだつた。

受験生達にとって、この情報は想定外のサプライズ発表となつただろうに・  
僕を除いて：

立体映像のオールマイトの説明によれば、僕らは筆記試験、問題なく突破。そして次  
に実技試験についての講評となつた。

ロボを破壊して手に入れるポイント・：そして守るべき一般市民・：同じ仲間ヒー  
ローを助けようとする行動・：それは『救助活動レスキュー・ポイント』とされていた。

『人助け』を・：そして『自分の考える正しい事』をする衛宮士郎君！君は試験中に  
色々な人を助けていたようだね、それにロボを壊してのポイントも入れれば実技試験 1

位だ！おめでとう！』

「おめでとう士郎」

「ああ！次は兄さんの番だな！」

『次に衛宮切嗣君…』

『君は口ボを壊してのポイントは1位…が、試験中に君は士郎君から武器を奪つたね？その点は減点する事になつた：けれども君は人を助けていたために加点もされる…よつて合格だ！おめでとう！衛宮切嗣君！』

「良かつたな！兄さん！」

「ああ：良かつたよ」

（ここからが本番だ… 雄英高校で両親の事を、コンビニのアイツの事を調べるんだ…！）

『後は…衛宮切嗣君に質問がある先生がいるらしいんだ、今からこのカフェに来てくれたまえ！』

そう言うとオールマイトが消え、地図がでてくる

（普通に近いな… 断つたら入学後が面倒臭い）

「士郎も着いてきな、場所も近いし」

「う、うん。なら昼食はたまには外に行こう」

久しぶりの外食だ、士郎はあまり外食する事を許さないからたまには食べたい物をアピールしよう。

「ハンバーーガー……」

「さあ行くよ、兄さん」

(無視は酷いなあ……)

「ええっと……どこにいるのかなあ」

士郎が周りを見渡して探してくれている。

「こつちだ……」

「！」

「気づかなかつた……しかもなんだこの人? 体調悪そうな人だな……

「貴方が雄英高校の先生ですか?」

「ああ、とりあえず席に移るぞ」

そう言わされたので席に移ることになった。

「で? 何の用ですか」

「お前の試験を見ていた……その時、お前は不自然な動きをしていた」

「着地の時ですよね?」

「そうだ、あれはお前の個性の応用か何かか？」

「いえ、僕も何があつたか分かつていません」

「ここだけの話……最近似たような事件が多発していて死傷者も出ている」

「何か共通点でもあるんですか？」

「死傷者の中には5人のヒーローが同時にやられていたりする……が、その中には遺言を残した奴がいた……」

「内容は……？」

すると先生はボイスレコーダーを取り出し再生させる。

『奴は……奴は化け物だ……最初は一般人にしか見えなかつた……んだ、我々は油断した……ソレに奴は我々の攻撃を躊躇して全員を一撃で葬りさつた……そのときのそのときの感覚はまるで……！』

僕はそこでレコーダーを停止させて……

「時間が飛ばされたようだつた……ですね？」

「ああ……そうだ、と言うことはだ、奴は雄英高校に潜入している確率が高い」

「ちなみに5人の死因は一緒ですか？」

「全員殴られた跡があつたから物凄い力で殴られたんだろう……すまんな、時間が来て

しまつた、俺の名前は相澤だ、最後になつたが入学おめでとう」

そう言うと相澤と名乗る先生は会計をすまし出て行つてしまつた。

「士郎… 横田もそろそろ行こうか」

「あつ、そうだなよしつ、これからハンバーガー屋にでも行くか！」

「！ そうだね、早く行こう」

（久しぶりのハンバーガー… 楽しみだ…）

「あらら、君の正体ももう少しでバレてしまうかもせんね？」

「貴様のせいだぞ、どうしてくれんんだ！」

「そんなに大声出さないでくださいよ… ここはカフェですよ？ 心を落ち着かせましょ

う」

「それに… あの相澤とか言う奴の個性は面倒臭いぞ、とても相性が悪い」

「私も下手にオールマイトと戦うよりキツイです… が、そろそろもう一人こちらの世  
界にやつてきます、その方に賭けるしかないでしよう」

「そんな事より今日もお仕事に行きましょう」

「ああ… 分かっている、今日は何人だ?」

「今日は… 6人ほどでしょか」

「分かつた、行くぞ」

「おい、これはどういう状態なんだ?」

「ギヤングとヒーローの戦いですよ、それにしても人数が多いですね、20はいますね」「ギヤングの始末か… 人目がつかない倉庫で取引をしてるどこを見つかり戦闘と考えた方がいいようだな」

「中に私が入りますので、逃げた奴らをお願いします」

「おいおい、間違えても負けるじやあないぞ?」

「分かつてます、では」

走つて扉に近づく、中では個性同士で派手に戦つているようだ

まあ私の個性になんの影響もないのの中に入る

「失礼します… つて誰も聞いてないですよね」

とりあえず近くにいたギヤング3人に個性を発動させる

「があ… ぐつ…」

「おい！お前ら大丈夫か？！」

「いやいや、大丈夫な訳ないでしよう？」

さらにもう一人に発動させる

「お前！イレイザーが言つてた2人組の内の片方だな！」

「多分そうですね… 私を見られたからには生きて帰れませんよ？」

すると目の前のヒーローは液体となつて襲つてくる。

「…どうしましようかね… 私の個性が効かなくなつてしまつた… ここは出来ること

だけやつて逃げるのが吉ですね」

逃げ回りながら個性で数人倒し、外へと逃げ出す

「すいませくん、後はお願ひします！」

「貴様… かなり連れてきたな…」

「待て… つ！貴様が我々の仲間を殺した奴だな… 仇討ちだ！」

液体を尖らせこちらに放つてくる。

「このデイアボロに… 勝てると思つてゐるのかあ！」

「あつ、個性使うの少し待…」

そんな言葉ももう遅い、彼の圧倒的な個性は既に発動している。

「ふん、前回のヒーロー同様殺してくれよう」

このデイアボロが手を下すのだ… 有難く思え！

一方的に殴る、殴る、殴る。これでヒーローは終わり、後は残ったやつもそのまま殴り、個性を解除する。

「つて… あつ、もう遅かつたですか…」

「何か問題でもあつたか？」

「いえいえ、なんでもないですよ… 帰りましょ？」

「ああ、そうするとしよう」

(私もデイアボロさんと戦つたら負けそうですねえ… そして、あちら側には士郎君？とか言う少年が2人目ですかねえ… 記憶は無しと見て いますがいつ戻るか分かりません… 早くこちらにも2人目が来て欲しいのです。)

# 大変な1日

『最近噂の犯罪組についてのニュースです： 最近の犯行は2人ではなく3人で行われているようです。皆さん気をつけてお過ごしくだ…』

ブツン

朝から物騒なニュースばかりだな… 見ても楽しくないな

「おい、兄さん！ ボーッとしてないで早く学校行くよ！」

「分かったよ… 急かさないでくれよ」

士郎は朝から元気だなあけど、流石に初日からの遅刻は不味いし、素直に行くか。

「やつと着いた…」

以外に距離があるな… 朝から遅刻したら中学の時より怒られそうだしきをつけよう。

「兄さんと同じクラスなのは嬉しいよ」

「僕も… 嬉しいよ」

授業中にサボつてたら家で怒られるから気をつけないと……。中学の頃より生きに  
くいな。

「土郎は先に教室に行つて……僕は職員室に行つてから向かうよ」「  
分かったよ……また後でな兄さん」

「失礼します……1—Aの衛宮切嗣です。相澤先生いらっしゃいますか?」

「ああ……いるぞ」

ビックリしたあ……寝巻きに入りながら過ごしてるので。

「実はなんですけど……こんな手紙が……」

「なるほど……この続きはまた今度だ……教室に戻れ」

閉め出された……それに、チャイムが鳴った。初日から遅刻した感じで教室に入るの  
か……これも予行練習と考えとこう。

ガラガラ

「「「「……」」」

視線が集まるな…… 関係ないけど…

「君！初日から遅刻かい？気をつけたまえ！」

「……」

「返信もないのか?!たるんでるぞ！」

(こいつ…… うるさいなあ)

ガラガラ

「お前ら…… 時間を無駄にしたくないし能力テストやるぞ」

「「「「は…… ？」」」

この人…… 常識つてものが無いのか？

「最下位は除籍処分ね…… 士郎は気をつけなよ」

「お、おう。兄さんもな！」

周りの緊張が伝わってくる、最下位になる気がしないので別に大丈夫だろう。

【第1種目】 50m走

「君は…さつきの…」

「うるさいなメガネ君…今は試験中だよ、話は僕に勝つたら聞くよ」

3… 2… 1… ピー

(こいつ…足から何を出しているんだ?!)

隣のメガネ君はジエットみたいなもので駆け抜けて行く。

(身体能力強化でも追いつけない…！仕方ない…！)

固有時制御・三重加速

「…！」

「クソ…」

2位だ…負けたか…

「僕の名前は衛宮切嗣だ…今度からは遅刻しないよ…それじや。」

「ちょ、ちょっと待ちたま…」

「ここは逃げて正解だろう。これ以外は…どうでもいいな、適当に中間狙つておこう。」

はあ… 今日も一日大変そうだな

「はあ… 今日はどうします?」

「知らん… 最近は完璧にマークされてるしな、少し静かにするか」

「最近は仕事も減り、ヒーローからもマークされてるため派手に動くことができない。」

「3人目のひとも仕事はしましたけど… 全然個性分かりませんでしたね~」

「そうだな… なんだつたんだろうな… コンクリートが斬られてたのは驚きだ… ポル

ナレフと言う男を少なからず連想させられた」

「誰です… それ?」

「お前は知らないともいい…」

「あつ… 前世の苦い記憶を思い出してる…」

「でも… 3人目の彼の前世を見ると100%こちら側の人間じやないんですよ…」

「変だな… それでも何か理由があるんだろうし、信用はしている」

「後は何か報告するよことが… あつ、衛宮切嗣つていたでしよう? 覚えてますよね? そ  
の弟の士郎君はヒーローとしてカウントしないようです」

「何? という事は別の誰かがあちら側の3人目の仲間としてまだいるのか?」

「ええ… 確認の手段はないんですけど確かにいます」

「早めに確認しに行くぞ… つと、あいつにしてもらえばいいのか」

そう… こちら側の3人目は…

「雄英高校に在学してますからね… 便利ですよね」

この件には一人とも笑いしか出てこない… 最高に楽しいですね。

(さあて… 本物のヒーローと偽物のヒーローを見分けられますかね? 正義の味方さ  
ん… ?)

「今日は昼からお酒でも飲みますか?」

「たまにはいいかもな… 買いに行くぞ」

(私も… 個性に磨きをかけときますか…)

(最後は… 悪すらも無くせるように…)

## 戦闘訓練

「今日は退学者出なくて良かったよな。兄さん」

今日の能力テストでの最下位は結局退学にならなかつたらしい。まあ： そんな事に成るだろうとは思つていたけどね。

「退学にはしないと思つてたけども： 緊張感があつていい能力テストだつたと思うよ、そんな事よりこの紙どうする？」

この紙とは自分のヒーローコスチュームについての紙だ。変なコスチュームは嫌なので割と真面目に考えている。

「うーん、出久とかは楽しそうに書いてたけど、俺は何も浮かばないなあ～」

(出久：？ 誰だ？)

「俺は赤と黒をメインに作る気だよ。兄さんは？」

「僕は： イメージを書いて提出するよ」

黒く膝下まである丈が長いシングル打ち抜きのチエスター・フィールドコートに黒の2ボタンスース、黒のネクタイ、グレーのワイシャツ、焦げ茶の紐なし革靴： つと。

「兄さん： 以外に求めるね」

「そうかな？まあ… 僕はこれで提出するよ、土郎も早く提出しなよ？」

「分かつてるつて！」

いつもは逆の立場だから変な気分だなあ。

「わーたーしーがー……普通にドアから来た!!?」

午後の授業の時間、オールマイトが教室に入ってきた。

オールマイトの登場に皆凄い興奮してる。僕はそこまででもないが：

「では授業を行うぞ！ヒーロー基礎学！ヒーローの素地を作るため、様々な訓練を行う

科目だ!!?」

へえ… 本格的に始まるのか。

「早速だが今日はコレ、戦闘訓練！」

「そしてそいつに伴つて…こちら！入学前に送つてもらつた『個性届』と『要望』に沿つて逃えた…戦闘服コスチューム!!?」

「着替えたら順次グラウンド・Bに集まるんだ!!?」

ワイヤイガヤガヤ

(コスチューム一つでここまで騒げる物なのか……)

「士郎！お前のコスチュームカツコイイな！」

「切島、お前もな！」

(なんで肩腕だけ赤色なんだろう?)

まあ、皆がコスチュームで盛り上がるのを当たり前だ。かく言う僕も少しテンションが上がっている。

「兄さんは……つて。似合つてるね……しかも大人っぽいくてカツコイイよ!」

「まるで殺し屋みたいな見た目だな、決まってるぜ!」

褒められているのかいなか：どちらでもいいが少しはコミニュケーションをとつておこう。

「ありがとう。士郎も切島も似合つていると思うよ」

すると切島は他の生徒にも話しかけていく。

「志貴、金木！お前らもいい感じだなあ！」

2人を見てみると、何か妙な感じだと自分の本能が訴えている。

(志貴に金木か：他の生徒とは雰囲気が違うな。少し気をつけてみる方がいいな)

「あはは、なんか思つてたより軍人みたいになつちやつたから心配だつたんだよ。・ありがとうな切島」

(確かに：・志貴のコスチュームは軍人みたいだな。何かそう言う経験を積んでいるのだろうか?)

「僕も自分に似合わないと思つてたからありがとう。切島君」

(こつちの金木とか言うのは： 白を基調としたコスチュームか：)

「やばい！ 授業が始まる！ 行くぞ！」

「始めようか有精卵供!!？ 戰闘訓練のお時間だ!!？」

「先生！ ここは入試の演習場ですがまた市街地演習を行うのでしようか!!？」

メガネ君がオールマイトに質問する。彼は委員長気質な人間だなあ。

「いいや、もう二歩先に踏み込む！ 屋内での対人戦闘訓練さ!!？ 敵退治は主に屋外で見られるが、統計で言えば屋内の方が凶悪敵の出現率は高いんだ。監禁・軟禁・裏商売：このヒーロー飽和社会。真に小賢しい敵は屋内にひそむ!!？ 君らにはこれから『敵組』と『ヒーロー組』に分かれて、2対2の屋内戦を行つてもらう!!？」

屋内戦か： まあ僕はどっちでもいいけど： アレの使用はどうだろうか？

「勝敗のシステムはどうなります?」

「ブツ飛ばしていいんスか。」

「分かれるとはどういう分かれ方でいいのですか?!?」

「また相澤先生みたいな除籍とかあるんですか?」

「銃火器の使用は?」

「んんんくくく聖徳太子イ……つて? 誰く今銃火器なんて言つたの?」

(使用許可と捉えよう。)

「いいかい?!? 状況設定は『敵』がアジトに

『核兵器』を隠していて『ヒーロー』はそれを処理しようとしている! ヒーローは制限時間内に敵を捕まえるか核兵器を回収する事。敵は制限時間まで核兵器を守るかヒーローを捕まえること。

カンペ⋮⋮ ダサいな。

「コンビ及び対戦相手はくじだ!」

「適当なのですか?!?」

「そこに飯田くんのツツコミが入る。」

「プロは他事務所のヒーローと急造チームアップする事が多いし、そういう事なんじやないかな……」

あれは巨大ロボの…なんて名前だろう?  
 「そ…うか…先を見据えた計らい  
 …失礼致しました！」

「いいよ！早くやろ!!？」

くじ引き欠課は…

A :	緑谷&amp;麗日
B :	轟&amp;障子
C :	八百万&amp;峰田
D :	爆豪&amp;飯田
E :	芦戸&amp;青山
F :	砂藤&amp;口田
G :	上鳴&amp;耳郎
H :	尾白&amp;葉隠
I :	切島&amp;瀬呂
J :	衛宮(切)&遠野
K :	衛宮(士)&金木

「先生…？これって1組余りますよ…？」

「えっ？ 嘘… カンペに書いてないよ… こんなのが…」

(おいおい…)

「とつ… とにかく余裕のある生徒に2回やつてもらう！ さあ… 最初は…」

「A対Dだー！」

――

「爆豪勝己… 馬鹿な奴だな…」

「兄さんどうしてさ？」

「自分の力を相手に見せつけようとしてる。この状況テープを巻けば全てが終わると言うのに…」

「なるほどな… 兄さんはよく見てるね…」

その結果…

『ヒーローチームWIN!!』

「爆豪勝己はメガネ君に助けられたな…」

「初戦お疲れ様！ ヒーローチーム勝利おめでとう！」

まあつても、今回のベストは飯田少年だけどな!!」

「なな!!」

今回のMVPは、勝利したヒーローチームの二人ではなくヴィランチームのメガネ君だつた。勝利したのに何故なのかと、疑問を持つ者もいることだろう。

「何故だろうなあ～～～？わかる人!!？」

「はい、オールマイト先生」

オールマイトからの質問に1人の生徒が手を挙げた。

推薦入学者であるポニー・テールの少女、八百万百。

八百万は説明を始める。

飯田がMVPを獲得したのは、最も状況設定に順応していたから。相手への対策を施し、核の争奪を想定できていたからというのが理由だ。

逆に爆豪は私怨を剥き出しにした独断行動と、屋内での大規模破壊行動が愚策であり、保健室に運ばれていつた緑谷も同様の理由。

麗日は中盤、気の緩みが原因で飯田に発見されたこと。それと最後の攻撃が核の争奪を想定していなかつた乱暴なものだつたということ。この二つが減点の理由。

最後に八百万は、ヒーローチームの勝利は「訓練」という甘えから生まれた反則勝ちであると付け加えて話は終わつた。

「それだけじゃないだろ?」

「遠野さん?」

「…概ねは八百万の言つた通りだが。そこについてはほぼ言及することは無い。けどひとつだけ……飯田が開始の際に爆豪を引き留められてたら、あの大規模破壊もなく、もつとスマーズに勝敗は決した。

身体能力が高い二人を同時に相手取るのは誰もが避けたいし。後々分断されるのはしようがないとして、最初から有利な状況を相手に提供してしまうのは愚策だな。ヒーローチームだけでなく、ヴィランチームにも甘えがあつたと言いたいんだ」

(こいつ… 戦況が良く見えてる。個性が弱い代わりにそれなりに出来るみたいだ  
な)

「そ、そうだね! 私もそれが言いたかつたんだよね、H A H A H A …」

「…私もそこは盲点でした。私怨で動く爆豪さんを御する事は無理だと思つて…勉強になりますわ、遠野さん」

「さ、さあ次の訓練に行こうか！次の対戦相手は……いつらだ！！」

オールマイトは二つの箱に手を突っ込み、中にあるボールを掴みとる。

「Kチームが『ヒーロー』！Jチームが『ヴィラン』だ!!」

「おつと？早速勝負だね？士郎」

「兄さんには負ける気がしないね」

「志貴、よろしく」

「ああ切嗣。足を引っ張らないようにがんばるよ」

「よろしく、金木」

「士郎君、頑張ろうね！」

「こうして僕らの戦いの幕が上がるとしていた……」

「ほらほら～！始まりますよ～！」

「馬鹿が…：あまり騒ぐな…：それにしてもそんなに楽しみか？」

「そりやあもちろんです。お互いの3人目がどれくらい強いのか：それに衛宮兄弟の実力もどれくらい上がったのかが知れるんですよ？」

「どうか。それにしてもこの映像…：どうやつて見えてるんだ？」

「何とかしてプロにハッキングしてもらいましたよ～。脅しで…」

「…：どつちが勝つと思うんだ？」

「どうでしょう…：ディアさんは？」

すると彼は確かに個性を発動させた…：そして目の前から消え、後ろの方に気配を感じる。

「貴様！その呼び方を止めろ！」

「わわっ…：やめてくださいよ、分かった、分かりましたよ～！」

「全く…：俺は今回の勝負…：衛宮士郎の方に1票だ…」

「私は衛宮切嗣君に1票です。さて?どうなりますかねえ?」